

四者協開催

7月30日（水）もくせい会館にて令和7年度福生市地区児童委員、児童相談所、学校、こども家庭センター等の関係機関による地区連絡協議会（以下、四者協）が開催されました。四者協とは、地域の児童に関わる問題について、四つの関係機関が情報交換等を行い、互いの理解を深め関係を強化し、児童福祉の向上を図るために毎年実施している協議会です。

福生市内の全小中学校から校長先生や教員の方々及び学校教育関係者、立川児童相談所職員、福生市こども家庭センター職員、福生市民生委員児童委員の四者、合わせて約90名と昨年に続き大変多くの方に参加して頂きました。



前半の講演会では講師の、NPO法人青少年自立援助センターYSCグローバル・スクール統括コーディネーター ピッチフォード理絵氏より「海外につながる子どもの現状と課題 ～よりよい支援につながるためのヒント～」をテーマにお話を頂きました。

☆講演より☆

海外につながる子どもとは「国籍に関わらず、父・母の両方またはそのどちらかが外国出身者である子ども」のこと。ハーフ、ダブル、ミックスルーツ、外国ルーツの子ども、多言語多文化環境で育つ子ども、帰国・滞日児童など呼び方はさまざまである。

文部科学省の調査では公立学校における日本語指導が必要な児童生徒は外国籍・日本国籍共に年々増加している。その中には何の指導も受けられていない児童生徒が多数いる。調査には公立学校に在籍していない不就学、外国人学校などの子どもなどは含まれない為、実数は更に多いと想定される。

福生市の現状（令和7年7月1日現在）

総人口 56,589人

外国人人口 4,745人（8.38%）内0歳から18歳人口 501人（7.06%）

日本人の人口は減少、外国人の人口は増加。

東京都の市区町村の中では最も高い割合。

ベトナム、ネパール、フィリピン、中国、ミャンマーなど60～70の国と地域の人が暮らしている。

海外につながる子どもの5つの課題

●課題1 「来日の形」

来日の経緯は様々、ことばも教育のバックグラウンドも様々である。

9割が保護者の都合での、本人の意志ではない来日（呼び寄せ来日）の為、日本語学習、教科学習のモチベーションの低さにつながっている。

自国では親族・祖父母と生活していたため甘やかされていたり、逆に面倒を見てもらえずに使用人扱いされていたケースなどがあり、保護者との空白の時間がある為、関係構築が難しい。来日後、新しい家族の中で生活するケース、家庭内に居場所がない場合もある。

●課題2 「ことばの壁」おしゃべりの日本語は勉強の日本語ではない

日本語は話せるが、学習の日本語が難しく授業についていけない。

年齢相応の国語力の習得には時間が必要である。

母語未獲得、母語喪失など言語の危うさが生じている。

●課題3 「学校生活」

就学拒否、不就学、不登校、日本の学校文化、学習言語、教科学習、高校進学などがある。

不登校の原因は日本語や勉強がわからない、友達がいない、いじめ、校則・規則の違い、部活動、給食、体育など理由は様々で複合的である。

出身国と日本の教育システムの違い、教育へのアクセスへの困難、公立学校と私立学校の差が大きいなどがある。

進学の壁に関しては、圧倒的な情報不足・情報に振り回されることもあり正しい情報が伝わりにくい。入試制度の複雑さ、自国のシステムとの差、保護者の過大な期待や教育は不要との考えから本人の希望との解離が生じる。



●課題4 「保護者」

保護者は日本がわからない、英語がわからない、日本の学校のルールがわからない、日本語の言い回しの理解が難しい、友達がいない、行政サービスへのアクセスがわからない、自国のしつけが日本では虐待になることもあるなどで困っている。

●課題5 「ココロ」

学業や学校生活への不安（勉強についていけない、友達ができない）

環境への不満（言葉の苦勞、出身国ではいい暮らしができていた）

親との衝突（親の都合での来日、日本人の友達の親と違う恥ずかしさ）

将来への不安（在留資格制限への不安、進学・就職への不安）

アイデンティティの喪失（自分の母国はどこ？なぜここにいるのか？）

※きょうだいの面倒を見ている、親の通訳などでヤングケアラーになっている場合もある。

マイクロアグレッション（無意識の偏見・無自覚の差別）

「無意識の行動や言動に何気なく表れる、人種やジェンダー、性的指向など歴史的グループに対する差別や偏見」

外国である日本で育つこどもの力が伸びるには

- ・安心できる居場所
- ・分かり合える仲間
- ・信頼できる大人 が必要不可欠

子どもたちが持てる力を発揮するためには

- ・自尊感情の育成
- ・居場所作り→「勉強」以外でも輝ける場所を
- ・学力向上への支援→学校が「居場所」にもなるように
- ・体系的・継続的な支援
- ・学校内の組織・体制・環境作り
- ・コミュニティ内の連携
- ・「日本語教育」「学習支援」は日本社会で文化的生活をおくる為、社会参加の実現の為にも必要不可欠



多文化対応スキル（やさしい日本語、文化、宗教理解と配慮、通訳・翻訳活用）

+

既存の社会資源（福祉、教育等の行政サービス、子ども食堂、無料塾、フリースクール等）

↓

海外ルーツの方も活躍できる社会資源拡大

人・学校・地域・行政・企業が積極的につながることで、多文化社会をつくる



☆グループワーク☆

後半のグループワークではピッチフォード氏が用意してくださった模擬事例を通して各機関の意見交換を行いました。

私のグループではフィリピン国籍の中学校3年生（16歳）の女の子で言葉の壁、複雑な家族構成、経済的な不安、養父からのひどい扱いなど問題を多く抱えているケースの支援について話し合いました。学校では学習面や進学、友人関係でのサポート、こども家庭支援センターでは家庭環境の把握から経済的な支援方法の提供、地域からの情報提供や見守りなどで連携していき、多方面からの支援が必要との意見がでました。

模擬事例の内容が実際にある事例ばかりだということ、色々な問題や困難を多数抱えている家庭が多いこと、友達や地域社会とのつながりが弱く孤立しているこども達の存在を知り、子どもたちが安心・安全に過ごせる居場所作りの必要性も強く感じました。

ピッチフォード氏の長年の経験による貴重な講演内容で学ぶことばかりでした。終始海外にルーツを持つ子どもへの熱い思いが伝わり、心動かされる瞬間が何度もあり、ピッチフォード氏の「一人ひとは点でも繋がって線になり支援の輪を広げて行きましょう」との言葉が印象深く、この言葉を忘れずに日々活動していこうと思いました。

今後、福生市では海外につながる子どもたちが増え、関わりを持つ、支援をするなどの機会が増えてくると思いますが、四者が情報共有し連携していくことで、単独では難しい課題も具体的な支援や解決に繋がると確信できました。

誰ひとり取り残されず、差別や偏見にさらされることなく、子どもたちが持てる力を発揮できる社会作りのためにできることは何かを考える機会をいただいたので、行動に移していきます。

四者が一堂に会することで顔の見える関係づくりができ、四者の信頼関係を強める良い機会になりました。年に一度ではありますが、四者協が福生市の子どもたちのより良い支援に繋がることを願い閉会いたしました。

